

あだし野の

さいころ
れう
ぶ



せりもも

◆

ばばさま。大変！

男が。

さゆりを訪ねて、男が参りました……。

なんと。

ばばさまのお手引きとは。

いったい、何をお考えです。

さゆりは、まだ、つきのものも見ない、子どもなのですぞ。

そう……。三月も前に。

いえ、知りませなんだ。

さゆりは、もう、子どもではなかったのですね。

ええ、ええ。

わかっております。

すべては、さゆりの幸せの為。

しかし。

あの男は、あまりにひどすぎるのでは？

だいたい、あのおつむりは、なんです。

^{えぼし}烏帽子が、つるつるすべっておるではありませんか。

……^{こくし}国司

ほう、羽振りはよろしいのですね。

しかし、年齢が、二回りほども違っております。

それに、あの、脂ぎった、赤ら顔！

論外。

ありや、ただのヒヒじゃ。

なんですと？ 別の男？

他にも、候補はあるとおっしゃるのか。
^{とこあらわし}

あの男が不実なら、^{床頭}し（結婚を周囲に知らせること）をせずに、別の男を通わせると……。

そんな……。

ばばさま。そのような……。

確かに、ばばさまが、いつまでも、後見であられることは、叶いませぬでしょう。

二親を早くに亡くしたは、さゆりの不幸……。

よるべない、あわれな子です。

だからいっそう、妾も、さゆりに幸多かれと願うておりまする。

しかし。

そこいらの男に、さゆりを^{めと}娶らせると、おおせらるるのか？

気にくわぬ。

ばばさま。

^{おんみ}御身もじゃ。

◆

おや。どこへ行ってしまったじゃろう。
さきほどまで、^{わし}儂を案内してくれていた^め女の^{わらわ}童は……。

なにやらけったいな屋敷じゃな。
やたらと廊が長い上に、^{はじとみ}半蔀が閉め切つてあるから、月の光も届かぬ暗さじゃ。
自分の鼻先も見えぬわい。
今宵、儂が来ることは、^{とじ}糸刀自も、ご存じであろうに。
なんと、愛想のない……。

うわっ。
……猫か。
ああ、驚いた。
危うく踏み殺すところじゃった。
これ、そのような目で、見るでない。
暗がり、目ばかり光りおつて。
おお、気味が悪い。
いやじゃ、いやじゃ。

……。

噂では、さゆりの君は、光り輝くほどの美形とか。
それに、まだ手つかずの純真無垢。
糸のばばさまと、^{じっこん}昵懇のわしだからこそ、つかめ得た、この幸福。
ふふふ。
まったく、どのような味の良さであろうの。
これぞ、色好みの理想というもの。
そう思えば、この暗さも、屋敷の不気味さも、風情があらうというもの。

……。

しかしのう。

女の童はいなくなってしまうし、猫は出るし。
何やら、ちょっとばかり、うんざりしてきたのう。

おおっと。
足が、ぬるっと。
ありやまあ、床板がぬるぬるするわい。
何か、こぼしたのか？
こう、暗くては、足元も見えぬ。

おう、御簾みすの向こうに、紙燭しそくの灯が……。
人の気配……？
若い女ではないな。抹香まっこう臭い匂いがするわい。
してみると、ここは、糸刀自きよしよの、居所。
ちょうどよい。
この婿むこあしらいに、一言、文句をつけてやらねば。

糸殿。失礼つかまつるぞ。

おや、文机ふづくえに向かっておられるのか？
向こうをむいて、うたたねか。
人を呼んでおいて、いい気なものじゃの。

これ、糸殿。
礼を違えてはおられませぬか。
客人を回廊に置きっぱなし、しかも灯もなしときた。儂は今まで、このような非礼に出会うたことはございませぬぞ。

糸殿！

……ぴくりとも動かぬ。
年も年じゃ。よもや、ぽっくりいっておるのではあるまいな。
この年齢なら、遠慮はいらぬ。御簾の内に男が入っても、文句はなかろう。

どっこいしょ。

あれ、さっきの猫が、こんなところに。

おや、何か舐めていたようじゃ。口の周りが……。

紙燭の灯では、充分に見えぬな。

糸……ど、……。

うわあ。

うわうわ、うわあー。

く、く、く……。

くび、くび、くびが、ななな、な、な、な……。

ねこねこねこねこ！

ふふふ。

ばばさまのくび。千切れて飛んだ。

しらがの頭、遠くに^は跳ねた。

灯の陰で、にやあにやが、なめる。

まあるい頭の、お首の切れ目を。

うふ。うふうふ。

うふふ。

はははは、は、はははは。

あーっはっはっはっは。

◆

さゆり。

ばばさまは、気の毒なことじゃったのう。

首が飛んで死ぬとは。^{いんごう}
いったい、どのような^{因業}なことをなされた罰か。

ああ。泣くでない。

ばばさまは、天のお星になって、さゆりのことを、いつまでも見守ってくれる筈。

……大丈夫じゃ。

^{わらわ}
妾は、さゆりから、離れはせぬ。

いつもいつも、さゆりのそばに居る。

さゆりの為に、ここにおる。

何奴！

垣の隙から覗いているのは。

この、不届き者！

見るな。

さゆりを、見るな！

……。

よいよい、さゆりを怒ったわけではない。

今、いたちのように去っていったであろう。

あの、野太い神経の男を、怒鳴ったのじゃ。

なんじゃ、あの白いものは……。

松が^え枝に結ばれた、あの……。

いや。

さゆりが見ることはない。

穢きものじゃ。目が汚れる。

向こうへお行き。

妾が、焼き捨ておこう。

……。

全く。

屋敷から、にじみ出るほどの、さゆりの美しさ。

げせん
下賤の者どもが、気を惹かれるのも、無理はない。

しかし、付文とは。

度し難い。わが身を省みぬ、無神経な男めが。

しかし、こうもやすやすと、さゆりをかいまみ垣間見されては、迷惑というもの。

ここはひとつ、見せしめが必要じゃな。

ま、せっかくの文じゃ。

その神経の凶太さに免じて、読むくらいは読んでやろう。

どれどれ。

ぬばたまの夜をまばゆく照らす月さゆりの君やこよい今宵待つらん

ぷっ。

駄作。

決めた。

こいつじゃ。

◆
ああ、驚いた。

何やら、得も言われぬ光を、屋敷のうちに認めた途端、^{どんてん}曇天にわかにかき^{くも}曇り……。

ぴかり、どろろん、どかん

あれは、雷神であったろうか。

恐ろしい。恐ろしい。

やはり、かの女には、近づかぬ方が……。

いろいろ悪い噂もある。

しかし、ちらりと^{かいまみ}垣間見た、あの、美しさ。

わが^め妻どもは、足元にも及ばぬ。

月とすっぽん、天女と鬼女じゃ。

よく見えたわけではないが、ちらり、見るだけで、充分わかった。

知らなんだ。あのように、^{たま}珠のごとく光り輝く女が、この世にあらうとは。

なぜ、あの美しい女が、わが妻ではないのか。

欲しい。

あの女が、どうしても欲しい。

なに？ さゆりの君から、返歌とな？

ゆめまぼろしではなからうな。

今まで誰一人として、かの君から、そのようなものを贈られた者はないのだぞ。

さては、かの高慢な君も、それがしの魅力に、くらりときたか。

ほほ。

ほほほ。

どれ、見せてみい。

うむ、^{うぐいす}鶯色の薄紙に、^{みずくき}水茎のあとも鮮やかに、^た焚き染められた^{こう}香は……^{きやら}伽羅か。

これが、かの君の香なのか。

君来るとわがまつしたの^{おぐらやみ}小暗闇^{こよい}今宵かけくるたちまちの月

……好きものではないか。

確かに今宵は十七日、立って待つほどにすぐ、月が上る。それを、今宵駆けくるときた。

夜は長いに。

男が来るのが、待ち遠しいのだな。

松の樹の下で待つ、と。

さすれば、外で？

あの美しい君と。

うう。

楽しみじゃ。

◆

まったく。

わがあるじも、物好きが過ぎる。

色好みとか言うて通ぶっておられるが、すでに、ゲテモノの世界じゃ。

これが、まともな貴族の家なら、それがしも、あるじの用（ふふ、ふ）のすむまで、気の利いた女房（貴人に仕えている女性）の^{つぼね}局に入り込み、思わぬ^{よろく}余禄にあずかれようというもの。しかし、あのような化け物屋敷では……。

あるじ殿とて、見た筈じゃ。

あの、雷の恐ろしきさま。

あれは、雷神の^{たた}崇り。

それなのに、性懲りもなく、あの女のもとへ行かれるとは。

なにより、同行を命じられた、わが身の不幸……。

あつ。

あれは…？ ぴかりと。

あの、赤松の梢に。ほら、ぴかりぴかりと。

あるじ殿。いけませぬ。帰りましょう。

なにやら妙でございまする。

あるじ殿。あ、あるじどのっ！

ああつ。

お体がつ！

まるで、誰かにつままれたように、空中高く……。

誰か、だれかあ一つ。

おお。

お体が、くるくる回っておられる。わが頭上で、主殿のお体が、^{こま}独楽回しのように……。

くるくる、くるくる。

くるくる、くるくる。

うわあ。

ち、千切れた。
あるじ殿の、手が。
足が。

あるじどの一つ！

なんだこれは。
ぼたり、ぼたりと。
上空から。

うわっ、目に入った。

生臭く、どす黒い、この、生温かい水は……。

血……。
あるじ殿の、千切れた体から落ちてきた、血。

ふうふうふう一つ。

……。

のびたか。
ひ弱な従者よのう。

今宵のことを、しっかりけんでん喧伝してもらおうと思うたのに、気絶とは。
頼りないことよ。このような者を召し使っていたとは、この男がかわいそうにも思えるな。

しもうた。
こやつ、名を聞いておくのを忘れた。
これでは、手足を千切った意味がない。

四肢と頭、胴体をばらばらにして、この国のあちこちにばらまこうと思っていたのだ。
きちんと名前を書いておかなけりゃ、誰の体の一部か、わかりやしない。

従者は頼りないし、しもうたのう……。

顔も、すっかり面変わりしてしまったな。胴体からひねり取った途端、青黒くすぼんで、誰やらさっぱりわからん。

ほほ、はかないものよのう。

◆

「誰そ！ ……なんだ。きつねか」

「ただのきつねではないぞ。 ^{びゃっこ}白狐 じゃ」

「きつねは、きつねじゃ。何用か」

「ちと、知りとうてのう。なにゆえ、汝は、さゆりに近づく男に崇めるのか」

「ふん。けものにはわからぬ道理よ」

「けものの身として、知りたい。誰が誰とつごうても、かまわぬではないか」

「これだから、畜生は……。まあよい。さゆりに近づいてくるのは、ろくでもない男ばかりだからじゃ。わがめがねにかなわん。妾はただ、さゆりの幸せを願うておるのみじゃ」

「ろくでもない男でなければ、崇らぬのじゃな。さゆりに、幸を導く男であれば、汝は、引っ込むのじゃな」

「そんな男がおればな。さゆりに見合う男なぞ、おるものか」

「それじゃ、さゆりは、ずっと、独り寝か」

「妾がついておる」

「しかし、汝は……魔物に男も女もないか。じゃが、汝に、マラは、ないのう」

「こら。匂いを嗅ぐな」

「マラなくば、さゆりが、かわいそうではないか」

「そんなものなくてよい。さゆりには、わが能うる限りの幸せを授けた」

「なんじゃ、その幸せとは」

「……むかし語りじゃ。昔、妾がまだ、 ^{どくろ}髑髏 じゃった頃……」

「髑髏だと？ いつの話じゃ、それは」

「なに、ほんの一昔前のことよ。この身のしばしあだし野にありし時、わが右の^{がんか}眼窩の下から、クマザサが生えて来よった。痛うて痛うて、たまらぬ。右目だけではない。頭全体が、割れるように痛むのじゃ。畜生に、この苦しみがわかるか？」

「そもそも、頭が痛んだことがないからな」

「単純な奴よのう。うらやましいぞ。そこへの、まだほんの子どもだった、さゆりが来たのじゃ」

「あだし野へ、そんな子どもが、か？」

「糸ばあさんが、連れて来たのじゃ。あの婆は、変わり者じゃった」

「靈魂と話せるのだったな。そういえば、あの婆も、妙な死に方をしたな」

「こっちを見るな。だいぶ前の話じゃ」

「だいぶ前ねえ」

「続きを聞きとうはないのか」

「おう、聞きたい。聞きたいぞよ」

「……笹を抜いてくれと、妾は頼んだ。しかし、あの婆、知らぬふりをして、通り過ぎようとする。その袖を引いて、かわいそうじゃ、気の毒じゃと言うてくれたのが、さゆりじゃ。かの女は、わが苦痛を、取り除いてくれた。お礼にな。妾はさゆりに、わが持てる限りの美を授けた」

「さすれば、さゆりの、あの美貌は……」

「おうよ。わが^{しゅ}呪よ。わが呪によりて、さゆりはかくまでうつくしいのじゃ」

「気の毒に……」

「気の毒？ 何を言う。妾はさゆりに、わがあたうる限りの幸を……美を、授けた」

「うつくしいは、不幸じゃ。外見しか見てもらえんからな。魔物を助けたばかりに、気の毒な――」

「黙れ。黙れ黙れっ。さゆりは、わが造り出したるうつし世の珠、^{ひっせい}畢生の傑作ぞ」

「わからぬな」

「きつねになど、わかってもらえなくともよいわ。^い往ね！ 往ね！」

「さゆりはな、恋をしておるぞ」

「こ、恋、だと？」

「さよう。恋じゃ」

「けものといえど、嘘は許さぬぞ」

「ほ、怖、怖。嘘と思うなら、さゆりの^{ふばこ}文箱をのぞいてみるがよい。^{らでん}螺鈿を巻いた、百合の花模様じゃ。やけどをしそうな恋文が、大事に大事に、仕舞われてあるからの」

「妾に内緒で……。い、いつの間に……」

「さゆりとして、魔物に報告の義務はなかろう。汝は、月のものが始まったのも、知らされなかったではないか」

「……」

「どうせ今度の男も、魔物のめがねに叶うまい。しかし、今回は、いつもと違う。なぜかわかるか？」

「わかりたくもない」

「さゆりの方から、仕掛けた恋だからじゃ」

「なに？ さゆりから？」

「やはり、マラの欠けた身では、不足ということよ」

「下品な。失せろ」

「かんら、からから。かんら、からから。かんら、……」

「笑うな。きつね、失せろ！」

「かんら、からから。かんら、からから。かんら、……」

◆

さゆり。どこへ行く？

寝てはおらぬぞ。妾は、眠ることはない。

ああ、わかっておる。あの男の元へ行くのだろう。

止めはせぬ。行きたければ行くがよい。

妾を置いて。

この暗く広い屋敷に、妾を一人残して。

……遠くから、^{ぎっしや}牛車のきしみ。馬のいななき。

今宵、迎えに来るのだったね。

今のお前には、何を言っても無駄じゃ。

恋に目が曇っておる。

しかし、目が覚めた時には、遅いのじゃよ。もう、帰るところもない。

それでも、行くのだね。

……ばかな娘。

妾が^{しどね}褥に伏せっている間に、さあ、行ってしまおうがよい。

◆

屋敷の奥のほの暗闇から、静けさの底を、そっと、爪の先で搔くように、衣擦^{きぬず}れの音がする。

ああ、さゆりの君。

わが宝。

どんなに、この日を、待っていたことか。

さあ、こちらへ。

ご自分の意思で、門を出ていらっしやい。庭に入り、牛車を^{きざはし}階に近づけて、もしや、邪魔をする方がおられては、いけませぬ。

……本当は怖いのだ。この屋敷に入った男たちの何人が死に、何人が正気を失ったままでいることだろう。磨^{まろ}は、その轍^{てつ}を踏みとうない……。

さあ。さあ。門を出て……。

さゆりの君。さゆりの君。

お手を。

あなたのその、白魚のようなお手を……。

さあ。

……え？

これが、さゆりの君の、手？

乾いて固い、これが？

確かに白い、でも、かさと……。

骨？

さゆりの……、

なんぢや。

煙が。怪しの……。

おおっ！

さゆりの君を、妖気が包んでおる。

ぎゃ、ぎゃ、ぎゃ、
溶けとる、溶けとる、
さゆりの君が……。
女が、溶ける。

うわあっ。うわあっ。

肉が溶け、髪がちらばる。
眉がないっ。目玉が飛び出したっ。

やめてくれ、歯をひん剥くのは。ああ、唇が線になり、糸になり……。

ぷっくりとした水けを含んだ、出盛りの桃のようだった頬は、……しゅーっと妖気を吐きだして、見る間にすぼんで……。

うわ、うわ、うわあっ。

どくろじゃあ。

寄るな。寄るなあっ。
そのような、汚らわしい身で、磨に近寄るでない。
妖気の中へ、引きずり込むな。

あっちへ行け。この、もののけめ。
者ども、弓じゃ。魔よけの あずさゆみ 梓弓 を打ち鳴らせ。

わわわっ。

骨……。妖気の散った後には、骨しか残っとらん。

骨が、動く？

うわあ。

寄・る・なっ！

ぎゃっ。

骨が弾けた！

ぱあんと。

頭骨が、背骨が、腰の骨が。

小さい骨は、とっくに散って、

うへえ。

口に入ったぞ。

骨のかけらが、磨の口に……。

うわあ。

うわあ

うわあああああ———っ！

◆

いいざまじあの。
男なんて、どれも同じじゃ。
頼りになぞ、ならんよ。平気で裏切る。

……遠い昔の、妾の男もそうじゃった。妾を、あだし野の、されこうべにした男……。

恋なぞ、するものではない。
本当に頼りになるのは、突き抜けた自分のうつくしさだけ。
それが、すべての拠り所になる。
それによって、生きていける。

わかったろう、さゆり。

一步、屋敷の外へ出れば、こうなる。
わが呪なかりせば、お前は、形を結ぶことさえできはせぬ。
妾とお前が、初めて出逢うてから、それだけの時が、流れたのじゃよ。

……。

大丈夫じゃ。
お前がどんなに不実であったとしても、妾は、お前を見捨てたりはしない。
骨のかけらを拾い集めて、再び、さゆりを造り上げよう。
前のさゆりより、もっといっそう、うつくしく。

そうやって、さゆりは、どんどん、どんどん、うつくしくなってきた。
次のさゆりも、少しだけ、さゆりらしさを、残しておこう。
それが、いつの日か、妾を裏切り、妾は、退屈せずにはすむ。

次は、何人の男を狂わすことができるかの。
殺すことが、できるか、の。

ふふふ。
楽しみじゃ。

あだし野のされこうべ

<http://p.booklog.jp/book/104514>

著者：せりもも

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/serimomo139/profile>

せりももホームページ

Read me in one sitting

<http://serimomo139.web.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104514>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104514>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ